

ESSAY

自著紹介 「O₂活性酸素物語」

近藤元治

京都府立医科大学第一内科

自画自賛という言葉がある。辞書で引くと「自分で描いた絵に自分で賛を書くこと」とある。これはなかなかできないことで、「誰かがやってくれないかな」と心待ちにしているも、いっこうに奇妙な御仁は現れてくれないものである。

先般、医学の世界だけではなく、一般の人たちにも健康との関連で注目されている<活性酸素>なるものをわかりやすく解説するために、「O₂活性酸素物語」(南山堂)を出版した。自分が酸素になって、女性言葉の<ワタシ>で自己紹介をし、ふとしたことで活性酸素に変身した途端に魔法の力をさずかり、人間の体内で悪さをはじめるといふ物語である。身体のなかで酸素がどんな役割を演じ、その際にどんなメカニズムで活性酸素が生じるのか、さらには活性酸素のイタズラから身体を守るために準備されているスカベンジャーにまで話が及ぶ。著者が「医学書ではない」と強調するように、女性言葉に引き込まれているうちに、いつの間にか病気や健康と活性酸素のかかわりを理解させられている、肩の凝らない読みものである。

もちろん、活性酸素はDNAを傷害して「発ガン」に働くのだが、著者はこの日頃は悪役にされている活性酸素に「ガン退治」の仕事を手伝わせて、見事に名誉回復をさせているのである。「毒をもって毒を制す」の章では、

こんなふうに語らせている。

「皆さまは、変身した私を悪者にしてしまい、近頃ではずいぶん邪険に扱っておられます。そのくせ、何か困ったことがありますと、「苦しいときの神頼み」とでも申すのでございましょうか、私に「何とかしてほしい」と頼んでこられるのですから、身勝手な方ばかりなのにあきれてしまいます。

私が、ガンになられたあるお方の中におりました頃の話でございます。その方のお仕事はドクターで、病院の院長先生でございました。以前に「活性酸素を抑えると健康によい」という記事を読んだことがおありで、色ずいた野菜を食べたり、ベータカロチンやビタミンCなどを、普段から飲んでいらっしやうたそうです。

健康診断でひっかかり、精密検査で胃カメラとCTと呼ばれておりますコンピュータ断層撮影を受けられました。その結果、どうやら「胃ガン」が原因の「転移性の肝臓ガン」らしいのが分かりました。検査の結果はご自分でご覧になっているのですから、周りの方が隠すわけには参りません。

……………

ちょうど、私の理解者で、いつも私を温かく見守って下さる「Kドクター」というお医者さまが、その方のお友達でいらっしやいま



写真上：治療前
写真下：温熱化学塞栓療法 6 カ月

した。日頃から、私がどちらかと申しますと、悪者にされておりますのご同情して下さいているお方でしたが、私の名誉挽回に、ひと肌脱いで下さることになりました。

.....

早速、Dr. K は外科の教授に胃ガンの手術をお願いしました。何しろ、肝臓に無数の転移が見られている、手遅れの胃ガンなのです。その原発巣を「切れ」と頼まれた教授は、目を白黒させました。「えーっ、これを切るの？」

Dr. K の希望は、手術で原発巣を切りとり、体内の敵の数を少しでも減らしておきたかったのです。同時にガン組織への栄養血管にカテーテルを埋め込んで、それ以後の治療に備えることでした。

.....

手術の後、しばらくは入院して抗ガン剤とデンプンによる塞栓と温熱の組み合わせ療法を行い、あとは外来で治療を続けました。非常に調子がよくなり、6ヶ月後のCTでは、肝臓内の転移は完全に消えてしまいました。復帰されたドクターは、治療を続けながら診療もされ、忙しい病院長の仕事をこなしてゆかれました>

デンプン粒子による塞栓はやがてアミラーゼで消化されるから、「虚血・再灌流傷害」により腫瘍内に活性酸素を産生する。その際に浸潤してきた炎症細胞も、活性酸素の供給源である。抗ガン剤のほとんどが体内で酸化・還元サイクルに乗って酸素(O₂)を活性酸素に変身させるから、デンプンに混ぜて投与された抗ガン剤は徐放されながら腫瘍内に活性酸素をつくり出していく。虚血組織に加えられた温熱によっても、活性酸素が生じるのが知られている。3年後に再発した患者は、ガン性腹水に対してOK-432の投与を受けるのだが、はじめの2~3日は好中球が群がってガン細胞に活性酸素を吹き込んで殺していく。正に、活性酸素がガン退治に働いているのである。

<Kドクターのお蔭で、ワタシたちが悪者扱いされるだけでなく、病気の治療のお役にも立っておりますのを、ご理解いただけたと思います。ようやく肩の荷が降りたようで、嬉しくございました>